

## 生活習慣病の新薬開発への挑戦 ～遺伝子改変マウスを駆使した創薬研究～

新藤隆行 教授  
信州大学大学院医学系研究科 循環病態学講座

2016年10月11日(火) 10:00～11:00  
藤井節郎記念医科学センター 4階セミナー室

生体内生理活性因子は、全身の様々な細胞で産生され、情報伝達因子として、細胞・臓器間の連関と恒常性維持において中心的役割を果たしている。一方で、情報の受信側の細胞・臓器では、生理活性因子の情報を処理する情報制御システムが存在する。我々は、アドレノメデュリン(AM)の様な生理活性因子がもたらした情報を、その情報制御システムである「RAMP システム」が巧妙に情報処理を行うことで、生理活性因子の多様性を生み出していることを遺伝子改変による疾患モデルマウス研究などから発見し、現在、この生体内恒常性システムをターゲットとした創薬研究を進めている。

一方、最近大きく注目を集めるゲノム編集技術は、疾患モデルへの応用の上で、従来の遺伝子改変技術を超越するポテンシャルを持つ。すなわち、遺伝子改変マウスが迅速に作製できるだけでなく、ゲノム編集能の高い特異性から、同時に複数の遺伝子の改変を体系的に実施できる。

本セミナーでは、最近のゲノム編集技術の動向と、我々が注目している創薬研究を紹介したい。



お問い合わせ先

藤井節郎記念医科学センター・初期発生研究分野  
竹本龍也 (内線 7915 takemoto.tatsuya@tokushima-u.ac.jp)